平成２３年７月１日　（第７２号）

鵜戸

《U-DOOR最終演奏風景》
鳳笙の音色が扉（自身の心）の開放を表現。はやる気持ち（太鼓の拍子）を押さへつつ、扉の奥へと足を進める。そこには、まばゆい輝きを放つ神代の世界があった・・・。

平成二十五年神宮式年遷宮

遷宮で 結ぶ人の輪 心の輪
第六十二回神宮式年遷宮

８８７－０１０１
宮崎県日南市宮浦３２３２
０９８７－２９－１００１　ＦＡＸ０９８７－２９－１００３
鵜戸神宮ホームページ
http://www.udojingu.com/

発行者兼編集者
鵜戸神宮社務所

ごあいさつ

宮司　本部雅裕

この度の東日本を襲ひました地震及び津波、または放射能汚染による被害に遭はれましたご関係の皆様にお見舞ひを申し上げますと共に、災害の犠牲になられた幾多の御霊の御前に心から哀悼の意を表します。

さて、当鵜戸神宮は長い間神仏習合の神社でありました。御創建は、第十代崇神天皇の御代と言ひますから、約二一〇〇年前のことであります。その後第五十代桓武天皇の延暦元年には第一世の別当光喜坊快久が神殿を再興し、寺門を建立して、勅号を「鵜戸山大権現吾平山仁王護国寺」と賜つたと社伝にあります。その後、明治維新の権現号、寺院の廃止に至るまで実に五十九世の別当がその任に当たつてゐました。別当とは神社や神宮寺に属し仏事を修した社僧ですが、五十九人の別当さんの詳細については稿を改めることと致します。

そして明治元年よりの神仏分離後、第一代宮司に新納美庫が新政府より任命されてゐます。以来当職で十一代になりますが、五十九人の別当の時代を考へますと、いかに延暦年間から明治初年までの鵜戸山の歴史が長いものであつたかが伺はれます。また日向の僻地にあつて、その信仰と生活とが偲ばれるのでございます。

その第一代新納宮司でありますが、私は当初、最後の別当五十九世「観空」が還俗して、そのまま宮司に就任したのであらふと簡単に考へてゐました。ところが実際は違つてゐたのです。

さすがに新政府は薩摩出身の人間を新宮司に充ててゐます。私は以前、網走監獄の典獄まで薩摩人であつたことをある小説で知りましたが、これは日向人の私の僻みでせうか。

宮崎県文書センター所蔵の鵜戸神宮関連文書によりますと、「鹿児島縣貫族士族　新納美庫　元彦八郎　文化九年壬申三月生　明治五年壬申四月二十二日

別当宮司先賢慰霊碑

春日神社社司新納彦八郎右之通申付候　鹿児島縣廳」とあり、さらに「春日神社祠官新納美庫　任鵜戸神宮宮司　兼補中講義　教部大丞従五位三島通庸奉　明治七年甲戌四月三十日」とあります。つまり新納は明治五年に鹿児島の春日神社社司に任じられ、ついで明治七年、新納に対し新政府は鵜戸神宮宮司を任命したのです。その後新納宮司は明治十八年三月に亡くなるまで宮司を務められてゐます。初代宮司は鹿児島のどこの春日神社ご出身であつたのか。お墓はどこにあるのか。この調査は今後の私の課題でもあります。

ともあれ、鵜戸の歴史に学びつつ、一二〇〇年をかけて五十九人の別当さんと、十人の歴代宮司が時空を超へて護り続けてきた「鵜戸さん信仰」の再確立に、なほ一層精励しなければなりません。

緑滴る鵜戸の峯、紺碧の日向灘に鎮まります、悠久の歴史に囲まれた鵜戸神宮へぜひ御参拝下さい。

東日本大震災発生

三月十一日、午後二時四十六分頃に突如三陸沖を震源地とする震度九・〇の大地震が発生。それに伴つて発生した大津波により未曾有の大惨事となつた。また、この地震に誘発されたかのやうに関東・東海・信越地方に至るまで次々と強い地震・余震が起きてゐる。

遠方とはいへ当神宮は岸壁に沿つた参道であるため、午後三時三十分の津波警報発令と同時に参拝者を避難誘導し閉門。午後四時四十分に避難勧告発令のため避難場所の確認をすると共に警戒態勢をとつた。津波警報の解除は翌日午後八時二十分であつた。

その後「東日本大震災復興祈願祭」を執り行ふと共に、現在も毎朝欠かす事無く「被災終息祈願祭」を斎行。

また、被災地の方の安否が気がかりであつたため、ご縁のある特別崇敬者へ、無事であることを祈りつつお見舞ひの手紙を発送した。

後日、大小の被災はあつたものの無事である旨の便りが届き、宮司をはじめ職員一同大変喜び、安堵した。しかし、犠牲になられた方、被災された方も多数をられるため、只々一人でも多くの方の無事と復興を祈り続けてゐる。

福島県・宮城県・岩手県他多数の方々より無事の知らせと現況報告が綴られた貴重な手紙。

例祭（二月一日）

参　進

宮司祝詞奏上

長岡氏「剣舞奉納」

舞楽「納曽利」奏舞

献幣使 宮崎県神社庁 杉田秀清庁長と楼門にて

末社　九柱神社改修工事

平成三年の改築より二十年が経過し、腐食がひどくなつた為、改修工事を行ふ事となつた。

三月一日　午後六時　本殿へ仮殿遷座祭斎行
三月二十八日　工事安全清祓祭
三月三十一日　改修工事着工（後藤組）
四月二十五日　改修工事終了
四月二十八日　午後七時　九柱神社清祓祭斎行
四月二十八日　午後七時三十分　九柱神社遷座祭斎行

改修成つた 九柱神社

祈年祭（二月十七日）

役員総代玉串拝礼

「浦安の舞」奏舞

参　進

修祓の儀

縁日大祭・シャンシャン馬道中再現
シャンシャン馬道中唄全国大会
（三月二十六日）（三月二十七日）

宮司祝詞奏上
修祓の儀

舞楽「納曽利」奏舞

「豊栄の舞」奏舞

「鵜戸さん獅子舞」奏舞

「シャンシャン馬道中唄」奉唱

表彰式

小池有矢・愛子夫妻
舘　直宏・早希子夫妻

4月3日　U-DOOR（ユードアー）

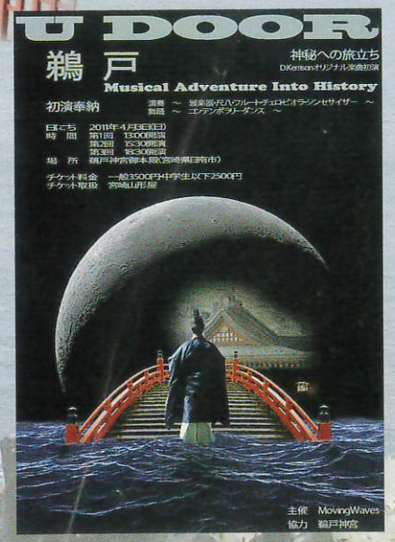
西洋と雅の融合音楽祭開催

四月三日、鵜戸神宮ご本殿にて西洋楽器と雅楽器による音楽祭が開催された。当日は午後より三回の演奏時間を設定し、一回の開演に八十席を準備したところ、三回ともほぼ満席となつた。

発案は、宮崎を拠点とし、全国で活動中の音楽家でギタリストのイギリス出身デビット・ケリソン氏。氏は大変敬神の念厚く、作曲の合間をみては当神宮へ参拝し、また、祭典行事のある日には度々来宮されてゐる。厳粛な空気のなか行はれる祭典と、洞内に響き渡る波音と雅楽の音色による神秘さを体感できるのが魅力的との事。

平成二十二年八月に、夫人であり当時鵜戸小学校教頭の吉岡けい子（旧姓）氏が宮司のもとを訪れ企画相談した。宮司より当神宮での開催地受け入れと全面協力の了承を得て、音楽祭開催が決定した。

デビット氏は、鵜戸の歴史と神話、そして神秘的な風景など、自分の感じたままを音符にしたところ、十二の物語で構成される曲が出来上がった。



新職員紹介

出仕　草場（くさば）　裕之（ひろゆき）
昭和六十三年十月二十五日生
國學院大学神道文化学部卒

常に周囲への気配りを怠らず、参拝者に気持ちよくお帰りいただけるやう一生懸命奉仕してまゐります。

出仕　安藤（あんどう）　祐一郎（ゆういちろう）
昭和六十四年一月一日生
國學院大学神道文化学部卒

この度、鵜戸神宮に奉職出来たことに感謝し、おもてなしの心を忘れずご奉仕いたします。

雅楽器は鳳笙・篳篥・龍笛・太鼓、西洋楽器はチェロ・ビオラ・フルート、和楽器の尺八が出演し、そこにシンセサイザーを組み入れてゐる。また、この曲に合わせて、神話を表現したコンテンポラリーダンスが舞はれた。

各パートごとに譜面を起こし、各自で練習。本番までに三回の合同練習を重ねて、本番を迎へた。余談だが雅楽器の譜面をつくるのは大変な苦労であつた。

本番までの期間、県内外ではさまざまな出来事や災害があり、一時は開催か中止かで悩む時期もあった。県内に暗い影を落とした口蹄疫感染。県外では東日本大震災。しかし、この音楽祭は、昨年と今年の一月に発行したこの社報に掲載の、干支絵馬の題字「絆」・「道」に込めた想ひを発信することで、みんなが少しでも元気に、少しでも心の支へになれたらとの思ひから、予定通り開催することとなつた。

今後も継続して、鵜戸さん（U-DOOR）から、皆さん（YOU-DOOR）へ、心に残る曲をお届けします。

《雅楽器奏者》
鳳笙　高橋
篳篥　河野
龍笛　中武
太鼓　伊東・渕田

巫女　川口（かわぐち）　真美（まみ）
平成四年八月二日生
日南農林高校卒

参拝者の方に、また来てもらへるやう心配りや挨拶をし、一日でも早く仕事に慣れるやうがんばります。

巫女　猪崎（いざき）　こころ
平成五年三月十八日生
日南農林高校卒

参拝に来られた方々が気持ちよく帰られるやう日々笑顔で接し、一日も早く一人前の巫女さんになりたいと思ひます。

新燃岳（しんもえだけ）噴火

一月十九日、宮崎県と鹿児島県の境に位置する霧島連山のひとつ「新燃岳」が五十二年ぶりとなる大規模な噴火をした。

噴煙が上空で風に乗り、都城市・当神宮のある日南市へと流れてきた。大量の火山灰が町中を包み、目中にもかかはらずまたたく間に辺りが暗くなつた。また硫黄のにほひが鼻を突き、視界も奪はれて大変危険な事態となつた。

現在、噴火回数は減少したが、未だ終息には至つてゐない。

降灰直後の鵜戸参宮道路。
短時間で大量に積もった火山灰。

潮風の杜鵜戸小中学校 三・四年生体験学習

五月二十六日、十名の児童が体験学習のため来宮した。午前八時に境内そばの「おちちあめ工場」にて製造見学と実技体験を行ひ、その後本殿に参拝。おちちあめの起源となる「おちち岩」の見学をした。

また、「おもてなし体験」として運玉授与所でハッピを着て、参拝者との交流を行つた。児童たちは、巫女さんにやさしく指導を受けながらの賑やかな体験となつた。元気な挨拶と明るい笑顔のおもてなしに、福井県や愛知県などから来宮された方々は元気をもらつたと大変喜び、笑顔で運玉投げを楽しんでゐた。

編集後記

○社報「第七十二号」をお届けいたします。
○表紙の写真は、融合音楽祭夜の部の演奏風景です。
○時に人は皆、同じ目的に向かつて一心となり、力を合はせてとても大きな目的の扉を開く。扉の向かふから差し込む麗しい光を体いつぱいに浴び、喜びや幸せ・絆の花が皆の心に開花する。このとても貴重な心の花がみんなに咲いてほしいと、言霊の力を信じ只管（ひたすら）祈り続けてゐます。
○みなさまのご参拝を心よりお待ちしてをります。

（髙橋嘉樹）